

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	オリーブまなびの家（放課後等デイサービス）		
○保護者評価実施期間	2026年 1月 7日		2026年 1月 31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)		(回答者数)
○従業者評価実施期間	2025年 12月 1日		2025年 12月 27日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)		(回答者数)
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 1日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	5領域に基づく専門性の高い支援プログラムと意思決定支援の推進	小集団での個別課題（主に認知トレーニング等）と、少人数グループでのコミュニケーショントレーニングを組み合わせ、5領域を網羅した支援を展開している。インテーク時の保護者聞き取りに加え、体験利用時の行動観察や対話を通じて本人の状況を把握し、個別のニーズに合わせた目標設定を行っている。	子どもの生活を豊かにし、日常生活へ支援が般化されるようプログラムを継続的に検証する。また、本人の小さな変化や意向を多角的に捉え、モニタリングを通じて計画へ即時反映させるプロセスの精度をさらに高めていく。
2	「引継ぎシート」と密な職員間連携による支援のPDCAサイクルの確立	毎利用時の各プログラムに対して「引継ぎシート」への記録・評価を徹底し、支援の検証・改善を行っている。また、朝の申し送りや日々の業務の中で、職員間で常に支援内容について検討・共有を重ねる体制を構築している。HUGシステムは保護者への適時な情報伝達に活用している。	非常勤職員を含めた全スタッフが、より円滑に支援の経過を把握できるよう「引継ぎシート」の活用方法を定期的に見直していく。また、現場での検討内容をより具体的に個別支援計画の更新へ繋げられるよう、記録の質を向上させる。
3	地域交流イベントと進路支援による「社会との繋がり」の創出	「彩りマルシェ」「夕涼み会」を通じて地域住民やきょうだいの交流を深め、障がい理解を促進。また、「卒業生交流会」や「進路ガイダンス」により、卒業後の生活を見据えた具体的な情報提供を行っている。	地域の学校や就労支援先との連携を更に強化し、「支援の引継ぎ」の標準化に向けた情報提供フォーマットの整備を検討していく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	関係機関（学校・相談支援事業所等）との更なる連携体制の構築	相談支援専門員が関与しない「セルフプラン」で利用されている家庭が多く、支援の中核となる担当者会議などが開催されにくい側面がある。また、送迎サービスを行っていないため、学校教諭と直接対面して情報交換する機会が確保しにくい。	相談支援事業所の介入がない場合でも、事業所から積極的に学校等へ働きかけを行い、「学校・家庭・事業所」の三者が一貫した方針で支援できるよう、電話や書面、保護者を介した情報共有の頻度を高めていく。
2	保護者同士の交流機会の更なる充実と多様化	中高生の利用が多く進路支援を優先したため、純粋な「保護者同士の交流会」の実施時間が限られていた。保護者アンケートでも「横のつながり」を求める声が上がっている。	進路学習会だけでなく、保護者同士がゆったりと話せる茶話会や、悩みや思いを共感し合える座談会を開催する。オンライン活用も含め、保護者様が気軽に参加でき、心強い繋がりを作れる場を定期的に提供していく。
3	利用希望に対する受け入れ枠の制限と自立通所支援	スペースの都合上、特定の曜日や時間帯の受け入れが難しく、特に就労されている保護者のニーズに応えきれない場合がある。	令和8年4月より1階スペースを開放し、課題実施後の余暇時間を設けることで利用時間を拡大した。これにより、保護者の送迎負担軽減と、子ども達の自主的な余暇の充実を同時に図る。また、公共交通機関の利用マナーの周知や、保護者と連携した安全な通所ルートの確認など、将来的な自立通所を見据えた情報提供を継続していく。